

## 幕末明治の写真師列伝 第七回 下岡蓮杖 その六

プチャーチンが、下田の玉泉寺に滞在していた間に、久之助（蓮杖）がその用達として接伴していたという逸話があるが、プチャーチン一行は伊豆君沢郡戸田村（へだむら、現沼津市）に滞在していたのだから、それは誤りだと僕は考えている。おそらくこれはその後のハリス、ヒュースケンが下田の玉泉寺に滞在していた時の逸話との混同であろう。久之助（蓮杖）の前半生が判りにくいのは、後年の下岡蓮杖が自分の半生を人に語る際に、あれもこれもと、この時もあの時もそこにいたと吹聴していたせいである。また故郷下田を出ては、また下田に帰るということを度々行っている。そのために記憶の混同ということもあるのだろう。

とはいえ、安政東海地震でとうに亡くなっていたと思っていた津久井郡阿津村の山口市郎兵衛は、久之助（蓮杖）が下田からひょっこり顔を出した時には、その当人が山口に預けておいた蓮の木の杖を建て、香を焚いて法要を行っていた最中だったという。久之助（蓮杖）の幽鬼のようなその姿に驚きつつも、その無事を喜び、この時の法要はただちに宴と変わったという。久之助（蓮杖）は、山口に預けていたこの蓮の杖を再び手にし、師恩を忘れざる決心を新たにして、名も久之助から号である蓮杖と変え、この蓮の杖と共に、師の董川の一族を津久井に移そうと考えて、津久井より江戸へ還るも、うまくいかず、また下田に帰ることになった。

その頃、下田では「漂民欠乏所」が設けられ、外国船の来船も多くなり、下田に居れば外国人より写真術を学ぶ機会もあるのではないだろうか。久之助（蓮杖）は思った。嘉永7年3月3日



麻布・善福寺



下田・玉泉寺

(1854年3月31日)に江戸幕府とアメリカ合衆国が締結した日米和親条約により、日本は下田と箱館（現在の函館）を開港し、鎖国体制は終焉を迎えた。初代駐日本アメリカ合衆国弁理公使・タウンゼント・ハリス（Townsend Harris, 1804年10月3日～1878年2月25日）は、通訳兼書記官でオランダ語に通じたヘンリー・ヒュースケン（英語: Henry Conrad Joannes Heusken, 1832年1月20日～1861年1月15日）を雇い、1856年8月21日に日本へ到着し、伊豆の下田へ入港し、下田玉泉寺に領事館を構える。その後、ハリスは大統領親書の提出のために江戸出府し、下田においては薪水給与や回比率などの問題を巡り、和親条約改訂のための交渉が行われ、安政4年（1857）5月には「下田協定」が調印されている。また、ハリスは安政5年6月19日（1858年7月29日）には、ついに日本（徳川幕府）とアメリカ合衆国の間で結ばれた日米修好通商条約に成功する。日米修好通商条約が締結された後に、ハリスは初代駐日公使となり、下田の領事館を閉鎖して江戸の元麻布善福寺に公使館を置くことになるのだが、この下田の領事館時代に、下田奉行所が新たに17人の足軽を求めていたのを幸いに、久之助（蓮杖）は四石二斗二人扶持、年手当金三両で、重立ちたる務として採用されて、下田玉泉寺の応接所に出仕し、御馳走係として茶菓煙草などの末に至るまでの万端の責任を負わせられることとなった。ここに久之助（蓮杖）の悲願の第一歩が始まったわけである。

（森重和雄）